金賞 コロナ渦で生まれた、愛と絆の大切さに気付かされるエピソードです。

私が働いている施設に入所して4年近く経過している女性のA様がいます。

A様は入所当時から認知症を患っており、職員との会話や意思疎通が困難で、発語もままなりません。そして、食事も排泄も入浴も含めて、その他日常生活全般にわ たって全介助を要するお客様です。A様には夫のB様がおり、B様はほぼ毎日のように面会に訪れておりました。B様はお仕事をしており、短時間しか会えなくても毎日のように、A様との面会を欠かさない方です。B様は我々、職員に対しても気さく話しかけて下さり、『お母さん(A様)のことをよろしくね、いつもありがとう』等の感謝のお言葉を頂いておりました。

皆様もご存じのとおり、2020年の3月頃から新型コロナウイルスの影響で、当施設でも面会が禁止となり、A様とB様が直接会う機会は無くなってしまいました。正直なところ、日々のA様の認知症などの状態から旦那様のB様が面会にいらしていることを認識しているか不明で、面会が出来ないことでA様に影響があるかわかりません。ただし、旦那様のB様にとっては最愛の奥様にお会い出来ないことはとても辛いだろうと、自分自身とても悲しい気持ちになったことを憶えており、新型コロナウイルスの感染が長期化しなければ良いと祈っておりました。

それから約2年の月日が経った今から半年前、A様の活気が徐々になくなり食事を召し上がることも難しくなってきました。(具体的には食事を摂っても途中で痰が絡んでしまい、食べられない状態になることで量を摂取出来ない) そのような状態が続いて、A様は看取り対応にせざるを得ない状況になってしまったのです。看取り対応と なったA様に対しては感染対策を講じた上で、直接面会をして頂いております。幸か不幸か、B様にとってのA様との再会は、看取りという形で実現しました。お二人にとっての、貴重な2年という空白の期間は、ただただ新型コロナのせいで誰のせいでもありません。私自身も面会に訪れたB様と現場で再会出来て、嬉しい気持ちになりました。B様は昔と変わらず気さくな笑顔で、職員が働いていて大変ではないかと労をねぎらうお言葉をかけて下さります。B様の心情を察すると、なんとも言えない儚い気持ちなりました。落ち込んでいても仕方ないので私達にせめて出来ることは、A様とB様が最期まで穏やかに過ごせる環境を作って行かなければならないと決心したことを憶えております。

ところが、それから1ヶ月、2ヶ月と経過してA様は徐々に食事が摂れるようになってきたのです！ 食事中、痰が絡むことが少なくなり問題なく召し上がって頂けるようになりました。これを書いている今現在、お看取りでの対応が相応しいかというくらい回復され、状態が安定しております。A様が回復された要因としては、現場の介護士や専門職を含めたスタッフが、A様に対してのケアをより良くするため、考え実行した結果であることは間違いありません。ただ、それ以上に最愛のB様との再会がA様に生きる活力を与えたのではないかと考えられます。A様はB様に会えて嬉しかったんだなぁと想像出来たとき、私自身も嬉しい気持ちになり、上の方で、「A様の認知症などの状態から旦那様のB様が面会にいらしていることを認識しているか不明で～」と書いた自分は、A様を良く観ることが出来てないなと痛感させられました。

誤解を恐れずに極端な言い方をすれば、愛と絆はどんな介護技術や医療技術にも優る特効薬と言えるのではないでしょうか。A様にとってのB様であるような、自分も自分が愛するひとの、生きる活力になれるような存在になりたいと思う様な出来事でした。

（介護職員）

銀賞

介護の仕事を「過酷」と感じた新卒職員が、あるご利用者との出会いで…

私は大学主催のプログラムに参加し、大学一年時に、カメリア会のとある施設でアルバイトをしていました。始めた頃は目標などは無く、ただ介護業務を行っていました。世間では、介護の仕事は“過酷”や“大変”というイメージがあるかと思います。私には、今でもこの“介護”という仕事を続けているきっかけとなった忘れられないエピソードがあります。

初出勤の日、介助中に叫んでいるご利用者を見て、私は介護という仕事の過酷さを身をもって実感しました。後日、叫んでいたご利用者とお話をする機会があったのですが、私は「また叫ばれたらどうしよう」「恐ろしい」と思いながら接していました。すると、ご利用者から何か私に話しかけてきました。私は何度か聞き返しましたが、聞き取れず困っていると、ご利用者が私の顔に手を伸ばし、私のマスクを取りました。すると一言、『可愛い顔してるんだね。』と素敵な笑顔を見せてくださいました。私は体中に電撃が走り、涙がこぼれそうになりました。何よりも、お話もしたことがない方に恐怖心を抱いていた自分が恥ずかしくなり、それからは一人一人の利用者の方と親身に付き合っていこうと考えるようになりました。

沢山の方と深く付き合えるこの“介護”という仕事を心から好きになり、「親身に接する介護」を目標に掲げ、今では、常勤職員として日々精進しています。もちろん、辛い経験や大変な思いをする事も多いですが、利用者の方の笑顔を見るたび、私は介護士として働いていくきっかけとなったこのエピソードを思い出します。

（介護職員）

銀賞　あるご利用者のお風呂上がりでの出来事です。

顔の形、髪型、体型、怒った時の顔、笑った時の顔、早口な話し方と方言、背筋をぴんとさせて歩く姿、机に肘をかけ両手を頬にあて左足を上にして足をくみ、少し眼鏡をさげてテレビを観る姿など、母親そっくりのお客様(A氏)がいます。

お風呂が大好きなA氏は足どりはやく、お風呂場に行きました。入浴中は歌を歌うなど楽しそうなご様子です。入浴後、新しい服に着替え、お茶をのみ一息したころです。介護士に『あたしのパンツどこやった』と、ホール中響きわたる声でした。介護士は「汚れたパンツは洗濯していますよ」とA氏に伝えました。A氏は『汚れてもないパンツなぜ洗った。あたしのパンツが洗濯機にまわっとる?あたしのパンツどこやった』との言葉が続きました。

A氏の視界に私の姿が入り、『あたしのパンツどこやったか知らん?あたしのパンツ、汚れてもないのに洗っとるといわれた。あたしのパンツがなくなった。』と話しかけてきました。ちょうどその時、介護士が「洗ったパンツを持ってきましたよ」と、A氏に声をかけました。A氏は介護士に『あたしのパンツがあった。よかった。心配やった。あんたは悪くないこと、わかっとる』といい、大切に1枚のパンツを抱えタンスの中にしまいました。

さらにA氏は私に『このパンツは母親に買うてもらった大切なパンツ』と教えてくれました。

仕事が終わり、3つのことを思いだしました。

1つ目は、A氏と接した介護士の懸命な対応に、和を感じさせるくらいの温かさがありました。2つ目は『あたしのパンツどこやった』『あたしのパンツがまわっとる?』というA氏の不安な言葉と表情です。3つ目は『あたしのパンツがあった。よかった。心配やった』というA氏の安堵した言葉と表情です。『このパンツは母親に買うてもらった大切なパンツ』というA氏のこころからの言葉とその表情に、私もこころ穏やかになりました。

（看護師）

銅賞 コロナ渦で感じたご利用者との向き合い方について。

施設に入居して数年が経ち、毎年家の前にある桜の花見をするのが恒例行事だったご利用者様が、新型コロナの影響で面会や外出が出来なくなりました。そのご利用者様は3月頃になると職員に、『まだ外出は出来ませんか？家の桜ちゃんが元気か心配で。30年ぐらい前に子ども会で桜の木を植えて、それを毎年見るのが楽しみで。もう何回見れるか分からないもんで。』と、何度も口にされていました。

その年は新型コロナが確認された年であり、未知の感染症にどう対処したらよいか分からず、職員の対応も「コロナが落ち着いたら見に行きましょうね。」と答えるしかありませんでした。

そして、桜が見頃を迎える4月になっても状況は変わらず、どうにかして花見が出来ないかを考えた結果、家族に協力してもらい、自宅と施設でiPadで中継し、花見が出来ないか提案し実施することになりました。

当日は天気も良く、満開の桜を見てもらう事ができ、家族から桜の枝を切ってもらい施設に持ち帰りました。本人にお渡しすると、『あー、桜ちゃん、今年も会えたね。元気に咲いてくれてありがとう。』と、嬉しそうな様子でお話され、枯れるまでお部屋に飾りお世話をされていました。

ご家族からは桜を見てもらう事が出来て良かったと感謝のお言葉をいただきました。

私達は、今年がダメならまた来年があると思えますが、特養に入居されている高齢者は、また来年が来ない事も当たり前にあります。日々、ご利用様と関わる中で、何気ない会話の中にニーズが隠れています。介護士として、その時のご要望をどのようにして叶えるかが、介護のやりがいに繋がり、その人らしい生活に繋がっていくのだと感じました。

（介護職員）

銅賞 技能実習生が感じた日本での介護とは…

日本にいる外国人の技能実習生として、忘れられない経験がたくさんあります。思いがけないこと、驚くこと、うれしいことから始まります。

最初に言いたいのは、日本にはご家族がいないということで、寂しさはあるだろうけど、利用者様や仲間達のおかげで、そして利用者様の笑顔を見ると、日本に家族がたくさんいるような気がします。その為に、私は利用者様の全員が施設で幸せに暮らせるように考えて熱心にならなければなりません。

介護の仕事を始めて驚いたことがいくつかあり、介護職として全力でサポートしようと思ったのに、できませんでした。利用者様ができると信じていることがあるとき、利用者様は助けられることを拒否します。利用者様は高齢で身体障害者ですが、それでも尊重しなければならないことがわかりました。全体を助けるのではなく、自立できるように支援することの重要性を学びました。

私は日本でたくさんの知識を学びました。それらはすべて役に立ちます。特に、入浴や食事、オムツ替えなどのお手伝いをお願いします。技能実習生が終わったときに、それは私の準備であり、日本での私の経験を共有するために母国に戻りました。

そして、夜勤中に、夜中に暗い廊下を歩き回っている利用者様がいることに時々驚かされました。読んで頂いてありがとう御座いました。

（介護職員）

銅賞 ご自宅で最後までその人らしく過ごして頂くために…

私のいる事業所の利用をはじめ、通いや泊まりに行きたがらないご利用者がおりました。娘様も『父がなかなか頑固でわがままで…。意思がはっきりしていて、つまらない、行く意味がない、行きたくないと言っていて…。ここでは難しいでしょうか？』と、困っていた。

そんな中で、こちらからご自宅に何度も出向いて信用信頼関係を築き、スタッフと顔馴染みになり、居場所や目的も見つかり来て頂けるようになりました。そこから3ヶ月後くらいに、娘様から『この前父が帰ってきた時に、楽しかった！スイカ割りもやれていっぱい食べてまた行きたい！と言っていました。最初は不安でしたが、本当によくしてもらっています。いつもお世話になり、ありがとうございます。』と、言われました。

このご利用者は、私の担当です。今では笑顔が本当に増えて、誰とでも沢山話をしてくれるようになり、体調や身体機能も見違えるほどアップしました。やってきたことが間違いではなかったんだなと、とても自信に繋がりました。

どうしたら自宅で最後までその人らしく楽しく過ごせるかを考え、近くで関われるやりがいのある仕事だと感じました。

（介護職員）

銅賞 日常での心温まるエピソードです。

（エピソード1）

お看取り対応中の利用者様のご家族様が、毎日施設へ朝から晩まで面会され、寄り添われておりました。そんなある日、他階で施設の節分行事が開催されました。私は赤鬼のお面や着ぐるみを着たまま、お看取り対応をされているお部屋へ訪問致しました。利用者様とご家族様と節分行事の記念撮影をした所、お看取り部屋の雰囲気がとても明るくなり、皆様微笑んでおられました。

（エピソード2）

スター歌手である西城秀樹さんの大ファンの利用者様の機能訓練を実施した際に、必ず「YMCA」や「情熱の嵐」の曲を流していました。一緒に振り付けを踊り、「君が一望むなら！秀樹！！」と右の拳を突き上げコンサートに参加をされているかのように体感して頂きました。ご利用者は、毎回楽しそうなご様子で機能訓練に参加をされていました。

（機能訓練指導員）

とあるご利用者からのサプライズで…

あるご利用者様が私の誕生日をお祝いしてくださった時のことがずっと忘れられません。

その方は、普段からよく話しかけてくださったり、電話をかけてきて体調を気遣って下さっていました。何かの折に自分の誕生日を伝えていたのですが、当日になるとその方から電話がかかってきて、お部屋まで来てほしいと。伺うとお菓子や手紙を用意して、私の誕生日をお祝いしてくださいました。不自由な手で一生懸命書いて下さったであろう手紙を読んで、感激のあまり泣いてしまいました。するとその方も『こんなに喜んでくれると思わなかった』と涙を浮かべられていました。

あの誕生日のことは忘れえない思い出です。

（事務所職員）

施設の日常で感じる原動力について

私は、15年ぶりに介護施設でお仕事をさせて頂いております。ふと、施設の日常とはどんな感じでしょうと、素朴な疑問がよぎりました。

1日の様子は、主にお食事に口腔ケア・排泄のお時間です。しばらくすると、温かいコーヒータイムのお時間となります。私はお客様に、「コーヒーに牛乳を多く入れますか？」と伺いました。お客様は、『牛乳は少なめが好きで、ちょっと甘めがいいわ。』と仰いました。私は、1杯のコーヒーを美味しく飲んで頂けたらと思い作りました。テーブルに置き、「コーヒーです。どうぞごゆっくり。」と伝えました。コーヒーを召し上がられたお客様は、『美味しいよ。』と仰っておりました。私は明るい気持ちのまま業務を続けました。

お客様からの、職員に対する思いやり・お気遣いは、頑張れる原動力になります。

（介護職員）

ついさっきまで何気ない会話をしていたのに…

―30分。

私とIさんという利用者様が最後に言葉を交わしてから、洗面台前でぐったりしたIさんを発見するまでの時間です。今から7年くらい前の話になります。

時刻は21時過ぎ。Iさんは、『もう寝るから、洗濯物が乾いたら持ってきてね。』と仰って、居室の扉をご自分で閉めました。普段通りの会話。夕食後には『〇〇(私の名字)さん、次ベビーカステラいつやるの？』と車椅子に座った状態で話かけてこられて「先週やったばっかりだからね。残ってる材料でクレープなら出来るよ。ただ私の勤務がね。」と、私が渋ると、『えーっ。じゃあクレープでも良いから何とかして。』と仰っていました。

何気ない会話。軽度の認知症を患っている方でしたが、会話は普通にされ、某有名アイドルが大好きな方でした。

洗面台の前で両手がだらんと下がり歯ブラシを右手に持ち、ぐったりとしたIさんが目に入った時、ただ事では無いと直感で感じ、看護師に連絡。看護師からは、「たまたま施設の近くにいる。救急隊への連絡はするから、バイタルと意識確認・酸素の準備を。」と指示されました。

しかし、バイタルも測れず意識も無い状況だったので、心臓マッサージの必要を感じ床に寝かせました。Iさんは以前、脳動脈瘤治療において、ステントを用いた治療をしていたので床と頭部のあいだに枕を置きました。到着した看護師の指示で心臓マッサージやAED処置をしました。

しかし…。Iさんは搬送先の病院で死亡が確認されました。

その後の時間の経過は曖昧ですが、当時の副施設長からの指示で、夕食後から発見時までの状況をA4用紙1枚にまとめる様にと指示され、某警察署の警察官から事情聴取を受けました。聴取も終わり、帰宅していいと言われたのは時刻が翌日になってからでした。終電を逃し事務所で途方に暮れていると、宿直でたまたま施設にいた当時の財務課長がタクシー券を渡してくれたため深夜2時頃には帰宅しました。初めて利用者様の死を目の前にしたためかその日は寝れませんでした。

この仕事に就いている以上、いつ利用者様との別れが来るか分かりません。皆様、後悔無きよう。

注）緊急時の対応は当時と変化してます。そのうえで私の7年前の記憶なのでマニュアルの対応や事実とは多少違う場合もあります。

（介護職員）

新卒職員が介護の楽しさを知ったきっかけのお話です。

新卒１年目介護職として働き始めこの半年間で印象に残っていることは、あるご利用者様とのエピソードです。

あるご利用者様とは、私が初めて介助をさせて頂いた方です。初めはどう接していけばいいのか分からず、声掛けがおぼつかなかったり、オムツ交換等も何回も右左向いて頂き、今ではかなり大変な思いをさせてしまったと思っています。その方は凄く心優しい方で、当時もどんなに時間がかかっても「ありがとう」と言って頂きました。その言葉にとても救われ今まで続けられたと思います。そして回数を重ねていき、あるご利用者様に「いつも、ありがとう、早くなったね」と言って頂けるようになりました。

オムツ交換も今は少し慣れ、最近では会話をしながら介助できるようになりました。その方の趣味のお話や若い頃のお話、その方が好きなオーケストラのお話など、踏み込んだ話などもさせて頂けるようになりました。今ではその方の介助を行わせて頂くことがとても楽しみになっています。

あるご利用者様のおかげで私は、技術面も上がったのかもしれないですが、それ以上に介護の楽しさを知りました。

（介護職員）

今まで介助でお食事を召し上がられていた方が…

今までお食事を介助にて召し上がられていたお客様が、ご自身で召し上がられた時、とても嬉しかったです。

そのお客様は以前まで、常食で、ご自身で召し上がられていました。体調を崩されてからは、食事形態を刻みに落とし、介助にて召し上がられていました。声かけを行うも、ご自身で召し上がろうとはされませんでした。

私がユニット異動した時はその状態でした。半年位、そのまま様子をみてました。食事の様子を観察しました。おやつは常食でご自身で召し上がられて いました。ご自身で食べる力はあるので、もしかして認識の問題で、形のある物であれば、また召し上がられるのではないかと思いました。

嚥下も問題なく、体調も大丈夫になっているので、専門職、ユニット職員と相談し、お試しで常食に形態変更すると、ご自身で召し上がられました。嚥下も問題無く召し上がらました。ご自身で召し上がられた際はとても嬉しかったです。提案、相談して良かったと思いました。

今後も、観察して、お客様に良いケアを行っていければ良いなあと思います。

（介護職員）

賑やかな敬老会の日に起こった出来事です。

『散歩』

長くお仕事をしていると沢山の思い出があります。その中の一つです。彼女はスニーカーを履き、いつもユニット内で本を抱えて歩いています。敬老会の日。町会の御神輿が出て賑やかに式が行われていました。

―ユニットからの連絡で彼女が見当たらないと!

私は施設内を探し回りました。他の居室、ユニット、カーテン裏など探しても見当たらず。その時点では防犯カメラが無い時でした。外に出た可能性もある!私は神輿の法被を着たまま自転車に乗り、パチンコ屋・スーパー・公園と大きな声で彼女の名前を呼びながら探しました。

見当たらずに施設に戻り、警察に連絡しようかと話をしている時、男性職員と手を繋いで帰って来ました。無事に見つかりケガも無く安堵感一杯です。

ふと見ると、彼女の手にはお豆を持っています。発見した場所の近くに豆屋があります。もちろんお金は持っていません。貰った?持って来ちゃった?謎です。でも彼女は笑顔でした。そのほこらしげな笑顔が忘れられず。おやつにはお豆を食べました!久しぶりのお散歩楽しかったんだなー。と思いました。その夜はグッスリと入眠してました。

私達、職員はヒヤヒヤの1日でした。

（介護職員）

対面式でのご面会が出来ない中…

コロナ禍で面会の制限をせざるを得ない状況の中、タブレット端末を使った面会をご家族様に提案させていただきました。

ご利用様はご理解される方もそうでない方もいる中、あるご家族は面会のグループを作って、藤沢市や大阪やアメリカにいるお孫さんとも繋ぎ、画面の中でしたがご利用様を見て安心される様子がありました。ご家族様からは、『コロナ禍で職員の皆様がご苦労されてる中、離れた家族と画面越しでしたがお互い会う機会をいただけました。ありがとうございます』とお言葉を頂けました。

これも介護をはじめ、各セクションの協力でみんなで出来たからだと思っています。

（事務所職員）

在宅で介護をされているご家族に掛けたある言葉で…

『もうこんなおばあさん、早く死んでくれないかな。毎日介護してるのに、感謝どころかわがままばかり。もう疲れたよ。』と、日々自宅で介護をしている長女様の気持ちを、私は定期的に傾聴し、「日々の喧嘩は辛いですが、前向きに考えたら親子で喧嘩するのは今しか出来ません。」と励ましていた。

　ある日突然長女様が、『自宅で亡くなりました。このくそばばあ早く死ねばいいのに、と言ってしまいダメな娘です。』と、落胆していました。しかし続けて、『でもね、喧嘩は今しかできないよと言ってもらってから、喧嘩はストレスに感じなくなりました。今は、十分満足するくらい親子喧嘩が出来てよかった。ありがとう。』と仰って頂きました。

　家族に寄り添う気持ちを大切にされていたので、家族に伝わったこの一瞬は忘れられません。

（生活相談員）